

大学生の＜自己の“老人”イメージの変化＞と
＜“加齢”に伴う価値観の変化＞について
大阪大・人科 山本 恵子

〔目的〕来るべき高齢化社会を迎え「老い」への理解・対処が要請される昨今である。さて、現代の青年は、自分自身の「老い（加齢）」にどのようなイメージを抱き、その“加齢”に伴い何に価値をおくようになるだろうと考えているのであろうか？この点を明らかにした実態調査の結果を報告し「老い」への理解の為の参考資料を提供する。

〔方法〕被験者：国立A大学生90名（男52・女38）国立B大学生85名（男17・女68）私立C大学生女 138名。調査時期：1995年6月～7月。実施方法：大学毎に集団実施。

〔結果〕①＜現在→30歳前後→45歳前後→60歳前後→80歳前後＞の年代毎に、＜有能性＞＜活動・自立性＞＜幸福感＞＜協調性＞＜温和性＞＜社会的外向性＞の6側面からSD法で自己イメージを調べた結果、＜30歳前後＞が＜温和性＞を除き他の5側面で最高値を示し全年代中で最高のイメージを描く。＜現在＞より＜60歳前後＞の方が＜幸福感＞＜協調性＞＜温和性＞での評価が高い。＜現在＞より＜80歳前後＞の方が＜有能性＞＜活動・自立性＞＜社会的外向性＞での評価は低い、＜協調性＞＜温和性＞での評価は高い。②A大学DATAでの性差検討の結果、男子の方が、＜現在＞では＜温和性＞の、＜30歳前後＞と＜45歳前後＞では＜協調性＞の評価が高い。＜60歳前後＞では性差は見られないが、＜80歳前後＞では逆に女子の方が＜有能性＞＜活動・自立性＞での評価が高い。③各年代で「最も大切なもの」が＜自分自身に関するもの（「自分の命」「健康」）＞より＜他者に関するもの（「家族」「子ども」「孫」）＞を第一に選択している者の方が、どの側面でも自己のイメージ価が高い傾向を示す。